

Citation: Leontiadis G I, Sharma V K, Howden C W. Proton pump inhibitor treatment for acute peptic ulcer bleeding. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2006, Issue 1. Art. No.: CD002094.pub3. DOI: 10.1002/14651858.CD002094.pub3.

CRG名: Upper Gastrointestinal and Pancreatic Diseases

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 14 November 2005

Clib issue No.; N/U: 2006 issue 1; Updated review

背景: 消化性潰瘍(PU)出血におけるプロトンポンプ阻害薬(PPIs)の臨床効果を評価したランダム化比較試験(RCTs)は、相反した結果を示している。

目的: RCTからのエビデンスを用いて、PUによる急性出血におけるPPIsの有効性を評価する。

検索戦略: CENTRAL、コクラン・ライブラリ(2004年第4号)、MEDLINE(1966~2004年11月)、EMBASE(1980~2004年11月)、2004年11月までの主な会議の議事録および論文の参照文献リストを検索した。製薬会社およびこの分野の専門家に問い合わせた。

選択基準: PUによる急性出血を対象にプラセボまたはH2受容体拮抗薬と比較したPPI治療(経口または静脈内投与)のRCT

データ収集と分析: 2名のレビューアが独立してデータを抽出し、研究の妥当性を評価し、研究を要約し、メタナリシスを行った。サブグループ解析およびメタ回帰分析により、アウトカムに対する研究の特徴の影響を検討した。

主な結果: 総数4373名の参加者からなる24件のRCTを組み入れた。再出血に関しては試験間に統計的異質性が認められた($P=0.04$)が、総死亡率($P=0.24$)および手術($P=0.45$)には異質性がみられなかった。総死亡率には、PPI治療と対照治療の間に統計的有意差が認められず、統合した総死亡率はPPI群で3.9%、対照群で3.8%であった(オッズ比(OR) 1.01; 95%CI 0.74~1.40)。PPIは対照治療に比べ、再出血を有意に減少させており、統合した発現率はPPIで10.6%、対照治療で17.3%であった(OR 0.49; 95%CI 0.37~0.65)。PPI治療は対照治療に比べ、手術を有意に減少させており、統合した発現率はPPIで6.1%、対照治療で9.3%であった(OR 0.61; 95%CI 0.48~0.78)。死亡率および再出血に関する結果が、研究の質、PPIの投与経路、対照治療の種類または初回内視鏡的止血治療の適用に依存することを示唆するエビデンスはなかった。PPIはプラセボに比べ手術を有意に減少させたが、H2RAと比べた場合は有意差が認められなかった。研究の質、PPIの投与経路または初回内視鏡的止血治療の適用が手術に関する結果に影響を及ぼしたことを示唆するエビデンスはなかった。PPI治療は、アジア以外で実施された研究に比べ、アジアで実施された研究でより有効性が高いようであった。総死亡率が減少したのはアジアの研究だけであり、再出血および手術はアジアの研究で量的に減少率が高かった。活動性出血の患者または非出血中の露出血管を有する患者では、PPI治療は死亡率(OR 0.53; 95%CI 0.31~0.91)、再出血および手術を減少させた。

レビューアの結論: PU出血におけるPPI治療は、プラセボまたはH2RAに比べ再出血および手術を減少させるが、総死亡率に対して総効果があることを示すエビデンスはない。

翻訳公開日: 06年6月23日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がありましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。

